

可能性が見えたら、やっちゃいますね。



JR久留米駅からほど近く、ビルの2階にコワーキングスペース「mekuruto」はある。運営の中心はビジョナリアルという会社のおきなまさひとさんだ。おきなさんは料理屋の息子として生まれたが、働く中で子連れで行ける店が少ないということに気づき、自身の店を子連れでも来やすいようにした。そうするとたくさん家族と接点ができ、そこから徐々に地域に対して店や自分自身が開かれていったそうだ。今では、さまざまな地域活動のプロデュースやコーディネート仕事を仕事として行っている。「mekuruto」はそんな彼らのような活動家のための拠点である。少し重い扉を開けて中に入ると、まず右側にバーカウンターが出迎えてくれる。そしてその奥には黒板に書かれた「ちくごエリアの新たな働きかたをめくる」という文字。反対の方向を見ると、クリエイターの作品や商品が棚に置かれている。正面を向くと家のような形をした骨組みがあり、その両脇が棚になっていてそこにはたくさん本が並んでいる。家の骨組みの下に机が置かれており、そこで仕事をしている人が数名いらっしやる。静かだがなんだか落ち着く空間だ。今回はその場所でおきなさんに「mekuruto」の成り立ちや思いについて伺った。

——「mekuruto」ってどんなところなんですか？

もともと「ちえつくプロジェクト」というものがあって。地域にいるキーパーソンのプラットフォームみたいなものですね。地域の活動をしている中で出会ったつながりがどんどん広がっていった、そろそろこのまちで食ってきたいねとなって。それで集ったみんなでつくり出した場所ですね。

——なるほど。

みんなが集える場所がほしなって。でも無理につくるということではなかったんです。みんな、暮らしを軸足として、暮らしを補うような仕事をしている人で。無理をして暮らしの部分を超えて活動をやってしまうと、自分の大切にしたいものが大切にできなくなるし、自分もしんどくなります。はじまりは、たまたま縁があって田中さんという不動産オーナーの方と出会ってつながっていったからでして。オープンまでのつく

るプロセスからいろんな人に関わってもらってできたのが、この「mekuruto」なんです。

——場所の完成はいつ頃ですか？

2018年1月26日ですね。今、1年ほど経ちました。便宜的にシェアオフィスと言うこともあるんですけど、いわゆるシェアオフィスをイメージしてなくて。コミュニティオフィスというか。自分の暮らしの軸が明確

になって、大切にしていきな

か？

いことが分かって、それでも地域やソーシャル（社会的）な活動に関わりたいたいという人が集まっています。だからここはスタートアップのためのオフィスではないんです。そのことについて、オーナーさん自身も納得してくださっています。それはプロセスから一緒につくってきたからできることだと思っています。

——スタートアップに入ってもらわない理由はあるんです

もちろん、スタートアップを否定しているのではないです。自分たち自身もスタートアップの時期があったのですが、ここで今やりたいのはビジネスではなく、暮らしを軸足にしつつ、目の前の暮らしを豊かにしていく活動なんですよね。そういう活動家の集まりで。ビジネスパートナーからするとゆるいと思われるかもしれませんが。ただどガツガツしたくないと思っています。これからそういう生き

方が自然になってくるかなと思っ

か？

ていますので。そうした摩擦が無駄に思えるので、ここではやらなくていいかなと思っ

ています。久留米市が起業家支援の施設もやっている

ので、ビジネスをやりたい人はそっちに行っていた方がいいです。住み分けですね。

——入居者などの判断はどうしているんですか？

ぼくがすべて面談しています。ビジネスをされたい方はやめていく。だからと言って、

関係性が悪くなるわけではないんです。まだまだこれからもたくさんの方を面談していきたいと思っていて。ご飯を食べて話してみても今は、シェアオフィスやコワーキングオフィスがするようなマッチングやコーディネートのサービスは一切行っていない。一方でイベントなどの場づくりはたくさんしています。混ざり合うようなプログラムや機会は用意しますが、そこから先のコーディネートやディレクションはしていません。

——運営資金はどうされていますか？

運営は、福岡移住計画と久留米移住計画で協力し合ってやっています。福岡移住計画の活動を通じて、ビルオーナーさんとのつながりができまして。オーナーさんとしては、このビルや地域にはすごい思い入れがあります。ご自身の親が誇らしく語る久留米とご自身の仲間の経営者が語る久留米が違って、ずっと歯がゆい思いをされていたんですよ。

——そうなんですね。

オーナーさんと会って話したらとっても寛容な方で。ギリギリしていないというか。ぼくたちの話を丁寧にいろいろと聞いてくださいました。オーナーさんは40歳半ばの方で。スペースづくりはいろいろな人が関わり、そして地域や暮らし軸で巻き込まれることが必要です。だから長い時間がかかるけれど、このオーナーさんだったら一緒にやるかもと思ったんですよ。

——なるほど。なんだかいい場所ですね。

自分たちの暮らしの場所にしていきたいなと思ってます。久留米の暮らしを豊かにしていく活動家の人たちのコミュニティオフィスとして続けていきたいなど。雑多なみんなの寄せ集めたじぶんたちサイズの部屋みたいな感じですね。

——先ほどから暮らしというキーワードを意識しておられますが、それはいつからで

か？

言語化したのはここ数年だと思います。ぼく自身は久留米に帰ってきて17年目です。まちの活動をはじめて11年くらい。まずはすでにあるまちの活動に巻き込まれて、自分もやってきました。でも暮らしというものが見えなかったんですよ。暮らしが別もののように感じてしまった。地域活性化やまちづくり、まちおこしなどという言葉にずっと違和感があったんです。

——なるほど。

自分たちは子育てというのがキーワードなんですけど。いつも言われていたのが「子育てとまちづくりは別だよ」と。「それは家や公園でやればいいんじゃないか」と言われていました。それでも、まちイベントの時は子連れで遊びに来てね、と。すごく商工的でビジネス的なまちづくりという観点しかないように感じて。ですので、他の地域のいろいろな活動を学び、みんなで話し合いながらここ数

年で「目の前の暮らしを豊かに」と言っているような感じですね。

——仕事と活動が接続されていなかったということですね。

そうですね。今は違いますけどね。

——よかったです。

場づくりをしていると、いろんなタイプの方たちが来られるんですよね。家の中で困難を抱えている人もいらっ

しゃるし、自分探し中の方もいらっしやる。楽しみを探している方もいらっしやあって。ぼくたち自身についても、自分にはなにをしたいのかという軸足を昔は探していた。でも、個人や家庭や、山や川やまちや地域などいろんなところを行き来して軸足を見つけたんですよ。

——なるほど。

だけど、軸足がしっかりした後の行き場がない気がしていて。暮らしに軸足を置いた

活動をしている人たち同士が自然とつながって広がってきいた時に、こういう場って大切なんじゃないかと思いはじめました。はじめのことを応援するという意味も当然あるんですが。

——「mekurto」のコンセプトはどのようなものですか？

久留米は人口30万人の中核市なんです。まわりに市町村がたくさんあるんですよね。でも昔は筑後という一つ

のエリアでした。地形的にも山や平野もあったし、筑後川もあって。さまざまな資源を川を利用して運んでいたの

イミングなんじゃないかと。「mekurto」は「ちくご」の新たな働き方をめくる」という意味でそういう名前になっています。久留米餅も久留米ではなくて広川町という場所です。くられてたりして。なので「ちくご」なんですよ。

いて。しかし、周りを見回すところの「ちくごエリア」で人

——なるほど。コンセプトはおきなさんが？

と人のつながりは途絶えていなかったんです。この昔のエリアの捉え方に戻して、「ちくご」という枠で考えるタ

いえ、場をつくるプロセスに関わってくれたみんなで考えました。

——登録している会員さんはどれくらいいらっしゃいますか？

今は17組です。個人事業が6割、法人は4割という感じですかね。

——日常の運営にはどんな方が関わっているんですか？

久留米移住計画のメンバーや福岡移住計画のメンバーですね。今後は大学生などにも関わってもらいたいと思っています。そういえば、お坊さんも一人増えるかな（笑）。

——どんな形で増えていきましたか？

できた最初はガンガン増えていったんです。でも今は微減しています。意図的に減らしているというところもありまして。籍を置いているだけみたいになっている人もいます。ですが、そういうのはあまり良くないなと思っていました。1年経った11月くらいに結構な数がやめて、最近数組増えたという感じですかね。

——なるほど。

スペースを貸してくださいという相談も増えています。利用料として2万円と一人ワンドリンクオーダーでレンタルしています。主催したくなるイメージを共有するために、自分たち主催のイベントも開催していますね。

——どんなイベントがあるんですか？

先週だと「暮らしの編集と書く仕事」というメディアに関するイベントですかね。編

集というのは発信を意識することからはじまるよねという

話で。ソトコトの編集者の方と新聞社の方、久留米市の広報課の方でトークライブをしました。あとは市長とタウンミーティングしたり。みんなで飲食を持ち寄りしてみたり。その他で言うと、オフィス会員さんが定期的な子どもたちのプログラミング教室や、トークイベントなどもやっています。基本的に会員さんは無料でイベントを開催できるようにしています。

共催として「mekurto」を入れてもらう感じでやっています。

と思ってもらえたらいいなと思っています。

「どうよっ」って自慢できるような自分の部屋です。

——会員さんも結構イベントを？

会員の方も月一くらいはそれぞれイベントをやっていますね。学校に行けない子どもたちのためのフリースクールを目指している人もいます。最近うれしなのが、シェアオフィスの子どもたちも来てくれること。主婦の方も結構来ています。自分たちの部屋だ

——自分たちの部屋だと思ってもらう工夫ってなんですか？

自分の好きなものを持ってきてもらうということはやつてもらっていますね。イベントをする際にステージに勝手に飾ったりして。大きな人形を持ってきたり、植物が好きな人は植物を持ってきたり。お客さんや友人、家族を自分のオフィスにお招きした際に

——他にもありますか？

自分たちもオフィスとして使っているの、集中している時に作業の手を止められないというのがあるなど思っています。運営者としては、建物に入った時の第一印象が一番大切だと思っています。ですので、一回パソコンを閉じて体を向けるということを意識しています。少しのことなんですけど、スマホや

PCの時代だからこそとても重要なことだと思っ
ています。大切にされている感じ、
というんですかね。

——確かに。

あとは、できるだけメン
バーさん一人一人に声をかけ
るようにしていますね。「寒
いですね」とか「今日はなに
してるんですか」とか。一方
で、メンバーや会員さんに任
せて自分はどこかに行くとい
うこともあります(笑)。

——そうなんです(笑)。

そうなんです(笑)。基本
的に月会費はフリーの席だと
1万5千円、固定席だと2万
円。スモールオフィスだと
6万円からという感じなん
ですが、月に一度シフトに入
ってもらい代わりに1万円と
いうような契約もあります。

——会員さんとの交流はど
のような感じですか？

昼ごはんをみんなで食べに
行ったり、夜も飲みに行っ
たりしています。数ヶ月に一回

は会員さんたちの家族を招い
た持ち寄り会もやっています。
あと違う施設を視察しに行
たりもしていますね。

——いいコミュニティです
ね。

近くの花火大会が「Inekurico」
から見えるんですよね。いい
空間になっていて。1年目
は花火を見るイベントをし
ようと言ってやってみたら
100人くらい来たんです
よ。でも自分たちはサービ
スの提供をしたいわけじゃなく

て。ですので今年からは会員
さんの家族や知り合いだけ
を呼んでやるようにしまし
た。結局70人くらい来まし
(笑)。大変だったけど、でも
そっちの方が幸せだなんて
思っています。

——イベントの時はどんな方
がいらっしますか？

いろんな人が来ますね。時
には少し空気感の合わない人
もいらっしやる場合があります。
でも疎外しないというの
は大切にしていて。来てし

まったら最後までその日は付
き合います(笑)。よくしゃ
べるおじさんもらっしやい
ますが、むしろいじり倒した
りしますね。関わり続ける。
違うことで自分たちの器の小
ささにいつも気付かされま
す。

——一年やっていて印象的な
瞬間はありますか？

最近になって思ったことが
ありまして。当初つくってい
た決まりやルールが自分たち
らしくないということなん

ですよ。すべてをグーグル
ドライブで管理してしまっ
たり、チェックシートでタスク
を管理したり。でもそうい
うのはやめようと。運営会議
で、おきなの部屋にしてい
いよとみんなが言ってく
れて、最近
はかなり好きなようにして
いますね。

——いい感じですね。

最近はおきなの子ども連れ
で懇親会に参加してくれる
のがうれしいですね。各家
庭いろんな事情はありますが、

は言ってしまうばもうどうでもいいんです(笑)。子どもたちは大人と話すわけではないけれど、ここにいる大人と一緒に空気を吸っていて。ぼくたちが目指しているのは会員さんが大切にしたい人たちから「あなた、ここに入ってよかったね」と言ってもらいたいなどということ。家族やパートナーからそう言ってもらえるのがなによりうれしい。

——素敵ですね。



とあるゲストを呼んだときは、100人くらい集まったんです。自分としては中一の息子にその最前線の話聞いてほしかったので、カウンターでバーテンみたいにハイ

ボールをつくらせながらその話を聞かせました。近所の子どもたちが、家に帰ったら鍵が開いてなかったからとりあえず「mekurito」にきた、みたいな。そんなことが今後増えると思っちやいいなと思っています。

——多様性がある場なんでしょう。

そうですね。でも年齢層がまだ開いていなくて。おじいちゃんおばあちゃんたちは来ていないですね。高齢の方に

は、内装を見て「ここはいつできるの？」みたいなことを聞かれたりします。「もうできとくとよ」って言っているんですけど(笑)。

——いろんな層の人たちにアプローチしたいと思っていますか？

一つの場合で成り立たせるのではなく、広いエリアで捉えいろんなプロジェクトでそこは回収しているのかなど思っています。ここでは公民館みたいなものもやりたいなど

思っています。大切にしたいことは、当たり前前にその辺にいる人たちが主役になるということです。ちょっと前に場をつくり出した人たちが場をつくって、彼らのような人のきつかけになることができます。人の可能性を活かしたいという思いがありますね。新たな自治ですね。

——可能性を活かすってなんでしょうか？

活かしていきたい部分



がたくさんあるように思っています。課題とまではいかないけれど、欠損というのかな。可能性が見えちゃって

るならやっちゃうしかないな
 と思っっています。メンバーと
 話していたときのことなんで
 すけど、ビジョン型や計画型
 ではなくて、目の前のことを
 やっていった、その中で欠損
 や可能性に気づいた瞬間にプ
 ロジェクトにするというか。

今も変わっていないんです
 けど（笑）。やりながらプロ
 ジェクト化して、さらに人と
 出会っていくことをし
 ているなど思っていました。
 今はその質が高まったり、自
 分たちの視野が自然と広がっ

てきたように感じています。
 ニューヨークやポートランド
 など、まちの名前を言われる
 と、すぐにイメージできるよ
 うなまちに、久留米もなれば
 いいなと思っっていました。

——なるほど。

きっと自分自身がその辺に
 当たり前にいた人だったか
 ら、可能性を活かすというこ
 とに関心があるのかなと思っ
 ますね。

——今後「mekuto」はど

んな場所に？

より一層会員さんたちの部
 屋にしていきたいなと思っ
 ています。まだ足りないなど。
 ぼくが怒るくらいにみんなに
 は自由にやってほしい（笑）。
 まだまだおりこうで様子を見
 ている感じがしますね。

——おきなさんにとっての部
 屋でもあるというのが面白い
 ですね。

そうですね。今は誰よりも
 ぼくの部屋です（笑）。

——でも本来、そうじゃない
 と場所を大切にできないのか
 など。場をつくった時に愛着
 の深さのレベルは人によって
 違います。その点、フリーラ

イドしようとする人に対して
 どう向き合うかは、運営者と
 して試されている部分である
 とも思います。

コミュニケーションはナマ
 モノだと思っっています。対話
 から新たな言葉や発見が生ま
 れたりしますよね。その会話
 を複数の人たちに向けて編集
 していくとすぐになにかがで

きたりするのかなど。よく場
 をつくる人って完成させよう
 として、枠をつくってしまっ
 ことが多くけれど、そういう
 ことに自分は興味なくて。逆

に言うともみなで「軸足から
 越境する先」で場をつくるん
 というイメージ。完成に至るま
 でのプロセスや実はドロドロ

した部分、ウェブサイトや
 SNSには載っていない空気
 感を多くの人は求めているな
 と感じるんですよ。それって
 暮らしとか日常に生きている
 人にしか届かない。熱量やエ

ネルギー。鮮度が命で、脈を
 打って生々しくて、その集
 まりがコミュニティだからナ
 マモノですよ。

——そういった運営に対する
 想いはメンバー間でどうやっ
 て共有するんですか？

今のところ自分の独断では
 ありません。今はこうやりた
 いと自分から言っていて。自
 分はゼロからつくる人かなど
 思っていて。なんでも最初は
 言い出すけれど、結局「あい
 つできないよね」となって、

みんながフォローしてくれて頭が上がりないっていう。そういういつものパターンです(笑)。今はそのフェーズから移ろうとしている段階で、ぼくは2年くらいしたら必要なくなるだろうと思っっています。

——明文化していくとかではなく、大切にしたいことを常に共有していくことが大切だと思います。外に置いてしまうと、自分のものではなくなくなってしまいうから難しいな

感じていました。

プロセスを共有していない人とは、根本的にズレてしまうことがありますね。言語化をするのは難しいですよ。言葉だけが先行してしまつて、言語化したことを軸に共有されると共に言葉が消費されていることにも最近気がつきました。きちんと話す、きちんと聞くということに力を入れていきます。「mekurito」のおかげでそれに気がつきましたね。

——最近の悩みごとってありますか？

今のぼくのテーマは、大学と企業なんですよ。暮らしている人やフリーランス、デザイナーとかぼくらとか。少し変わった面白い人がいて。行政との仕事はいい感じですが、がつている感じがしています。でも今後は企業さんとながつていく必要があるなと思っています。中小企業の社長や経営層は自分たちの世代になっているからつながつているけれど、大企業のムー

スターやブリジストンとまだきちんとつながっていないなと感じています。難しいですね。大学生とは関わっているんですが、大学自体との関係性がない。個別の先生レベルでは仲がいいけれど、大学としての信頼関係がまだまだこれからだなと思います。

——相手側にとってどうメリットを出すかというのは難しいですね。

時間が解決してくれる部分もあるかもしれないけれど難

しいですね。イベントではライブ中継をはじめたんですよ。

ね。気になるけど行けない人、ほんとは来たかったけど行けない人の関心を途切れさせないように、時間や場所、方法を変えたりして届けています。あんまり言わないんですけど、家のドアの中にいる一人の人にどうアプローチしていくかがまだ足りていないなと思っています。本当はそこに関心があるんですけどね。情けないことにまだまだ全然できていなくて。これからだ

と思っています。

——場は常に固定化したり、排他的になったりする中でどうしていくのかということはどうして持つておく必要があると思います。これから場づくりをやりたい人に向けてなにか伝えたいことはありますか？

ぼくは場づくりを意識したことがないですよ。自分と目の前の誰かの想いからスタートして、場づくりをやっていけばいいのではと思っ



います。複数人になっても一緒なのかと思いますし、やっтерることは変わらないんじゃないかなと思います。具体的な誰かを大切にしていくこと。やっていく中で変わってしまうことがあるなど思っでいて。誰かの評価とか。間と場を大切にし、越境した先でどう一石を投じていくかが重要なと思っています。

名前 おきなまさひと

生年月日 1982年1月8日

職業 まちびとフリーランス

福岡県久留米市を軸に「好きなことを、好きな場所で、好きな人たちと暮らす」じぶんサイズな暮らし方を選ぶ人たちを「まちびと」と呼び、飲食や広場、コミュニティカフェ、シェアオフィスの運営や、中核市クラスの行政事業のコーディネート役として、まちに携わる。地域で暮らすプレイヤー自身が、暮らしの軸足から「じぶんたちの目の前の暮らしを、少しずつ豊かにしていく」無理のないプロジェクトづくりを生業とし、全国各地の地域のコーディネーター活動や、企業・行政での地域連携アドバイザー業も行う。

はっぴーの家ろっけん

Yoshihiro Shino
首藤義敬

取材・文 藤本 遼

介護付き多世代型シェアハウス

JR 新長田駅を降り、鉄人28号を横に見ながら南に10分ほど。アーケードが途切れた商店街のはずれに「はっぴーの家ろっけん」はある。緑と白で塗られた6階建てのその施設は、外に看板らしきものはなく、一見するだけではなんの施設かわからない。聞くと、サービスパ付き高齢者住宅という機能を持つ施設らしい。しかし一度中に入ってみると、地域の子どもたちが走り回っていたり、そのお母さんと入居している高齢者の方が談話していたり、行政職員が仕事の打ち合わせをしていたり、若者がパソコンで仕事をしていたり、とても賑やかな場であることに気づく。同時に、きっと一朝一夕でこんな場をつくることはできないだろう、と思わされる。首藤さんと出会った頃のことはもう忘れてしまった。だけど、茶髪でいつも色味の強い服を着ているマイルドヤンキーのような彼が、この空間をつくっている張本人であるらしかった。

―改めて、首藤さんの経歴を教えてください。

ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんが、淡路島から駆け落ちして神戸まで来てるんですよね。当時、彼らは駒ヶ林というエリアで闇市をやっていた。実際にそれは世の中に求められていた仕事で、警察の目もあつたんやけどうまくやっていたらしい。じいちゃんとは会社を10個くらいつくった変わった人で、事業がうまく回るとその会社を人にあげていた。そんなこともあつて

自分が幼稚園くらいの頃は、めっちゃくちや裕福な生活をしてた。新長田のまち自体にもたくさん人がいたし、自分たちも暑苦しいくらいの長屋コミュニティで和気あいあいと暮らしてた。

―なんかええ感じの子ども時代やね（笑）。

小学校3年生の時に阪神淡路大震災があつた。それ以降、地域コミュニティが崩壊した。今振り返ると、そのことが自分のアイデンティティ

になっているんやなと思う。実際に友人が亡くなったということもあるんやけど、一番大きかったのはまちが戦後の焼け野原みたいになつてたことかな。当時10歳くらい。信じるものがなくなつてしまつて、心の支えがほしかったんやと思う。その後、実際に復興していく中で建物は建つた。そりゃ、建物だけついてもあかんよね。そこに違和感というか、気持ち悪さがあつた。

——それは大きな体験やなあ。

ウチは一家全員自営業をしていたから、だれも昼間家にいなくて。祖父が社宅を運営していたので、自分はそこに住んでいた。家のど真ん中でつかいリビングがあつて、その周りに部屋がいくつもあつて。そこでみんな暮らしてた。じいちゃんが自分と似てるんよ。仲良くなった人をどんだん家に連れてきちゃう人。ほんまに誰でも連れてくる。どうしようもないおっさんとかね(笑)。自分は子ども

もやったけど、そういう人たちと一緒に遊んだ。だけど、建物が焼けてしまつて人がいなくなった。おじいちゃんの会社も長田という小さなエリアで事業を回してたから成り立たなくなつてしまつて。

——震災以降、暮らしが大きく変わった。

そんな中で、家督争いのようなことが起こつた。被害を受けず残つたものをどう分配するかとか。震災以降、親と親戚がずっと喧嘩していて。

そういうこともあつてだんだんと家に帰るのが嫌になつていったんよね。中2くらいからはほとんど家に帰らんようになってた。あれは今思うと、家族に対する当てつけやつたなつて。

——中2からなんや。早いね。

高校は一年で退学した。やる事がなくなつたし、一生家に帰らんと思つてたね。

——キツイね。

狭いまちやからいろんなこ

とを言われてた。会社がなくなつたとか、家族がもめてるとか。だから地元を歩きたいと思わなかった。元々の実家が六間道にあるんやけど。

——じゃあ長田(六間道)とはしばらく関わらず？

中2くらいから10年くらい長田と距離をとつていたかな。自分はいろんな人の間で育ってきたから、コミュニケーションは好きやつたし、自分の近しい人同士が仲良くなつていくのは好きやつた。でも戻る

うとは思わなかったね。

——当時はどんな暮らしを？

ヒモ生活みたいな感じよね。20歳くらいのとき、バイト先のバーで店長をやってみるかと言われて。当時、奥さん(みゆきさん)とも結婚しようかという話をしていたし、そこで働き続けるのもありかなと思つてた。でも、親から連絡があつて一緒に暮らさへんかつて。正直、清算しきれてない部分もあつたんやけど、帰つたんよね。最後の機会かなと思つたし。あとは、

自分の奥さんと子どもだけで暮らすのも、それはそれでしんどいやろなと思つてた。やから、妹の夫婦や叔父、友達も一緒に住もうと思つて。まあ、実際にやってみると、嫁姑問題とかいろいろと大変やつたね。でも、ある瞬間から暮らしやすくなつたんよね。おじいちゃんも子どもがいたから認知症が和らいだし。自分自身も、親と直接向き合つてたらダメになつてたと思うけど、いろんな人がいたからそれも軽減されたというか。家族関係の修復はできひんかもし

れんけど、一緒に暮らせたんよ
ね。

——暮らしやすくなった瞬間
について、もう少し詳しく聞
きたい。

みんな不完全やったんよ。
自分も仕事をほとんどしてい
ない時期やったけど、みんな
でいたからこそ生きていけ
た。不完全な状態だからこそ
一緒に暮らすことができた。
そんな感じ。だから不完全な
ものを完全にするんじゃなく
て、不完全なまま回してみる、

不完全なままやってみるとい
うこともありなんじゃないか
と思うようになった。それは
大きな体験やったと思うな。

——生活する中で危うさのよ
うなものは感じなかった？

危うさというか、普通に生
活したいという憧れのような
ものはずっとあった。こんな
ことはずっと続かないなっ
て。でも、この状況が変わっ
たらどうなるんやろうってこ
ともわからへんし。だけど関
係性は日々、変化していくも

のやなど思った。同じ状態が
続くこと、安定しているよう
に見えることにこそ、危うさ
が潜んでいるのかもしれへん
など気づいたね。

——なるほどなあ。

関係が崩れてしまうとき
は、自分中心というか自分だ
けになるときやと思ってる。
お互いに対して目を向けてい
る限りは大丈夫なんかなど。
そんなこともあって、自分は
バランスっていうのを大事に
してるんよ。なんか違和感が

あるなど思ったら、そこにエ
ネルギーを入れるようにして
いるし、今のはつぴーの家で
もそのことを意識している。
お互いのベクトルの合わせ方
とか、パズルのかみ合い方を
考えるという感じかな。

——お互いに対して目を向け
ていることが重要。

でも正直、諦めもあった。
自分自身に目を向けてほしいと
か、もっとうしろしたらいのに
とか、そういう思いもあった。
やけど、それをやってもぶつか

るだけ。わかりあうということ
は、難しいなって。でも、一緒
に暮らしていかないと生きてい
けない。共感し合う必要はない
けど、共存し合うことは大事で。
わからなくても一緒にいるとい
うことやね。

——「同感」という意味で「共
感」が最近使われているのが、
ほくもちょっと気になってい
て。「それ、わかる」というの
が同感で、「それはわからない
けれど、あなたがそう感じて
いることに対して寄り添いま

す」というのが共感やから。

子どもの頃からわかり合え
ないという経験をたくさん積
んできたんよね。おじいちゃ
んの社宅に住んでいたとき
も、外国人がいっぱいたし。
おじいちゃんが他の国の人と
も仲良くしないといけないど
か言って、外国人を雇ってい
た。しかもどうせ雇うなら地
球の反対側の人だとか言いだ
して、ブラジル人が来ていた
り(笑)。彼らの子どもや家族
とも社宅で一緒に住んでたん
やけど、はじめはほんまに腹

が立ってた。夜中まで騒いでるし、休みの日は道端で肉を焼き出すし(笑)。でも、しばらく一緒にいると、言っても仕方ないと思うようになるよね。文化の違いとか綺麗な言葉じゃないんやけど。

——面白いね。はっぴーの家に至るまでに、仕事もいろいろやったんよね。

そうやね。20業種くらいかな。

——多いね。

いろんな人が暮らしている

場所で育ったから、基本的にグループやコミュニティをつくるのが得意やった。取りまとめるというか。そうした中で、いろんな人の相談を受けて対応することが好きになっていった。そこで自信をつけたんよね。なにをやったらいいかはわからなかったけど、好きなことをやればいいなって。バイト時代も時給で働くっていう発想はなかった。どうせ働くなら満席にしたいとか。それはインセンティブがほしいということではな

くて、自分が楽しむためやったんよね。で、最終的にどんな仕事に落ち着くんやろうと悩んでいたときに、困っている不動産屋さんに出会った。それがターニングポイントやったな。要は、相談を受けたのがたまたま不動産の仕事やったという感じ。結局、常に自分の関心は、モノを売るとかサービスを生み出すとかいうのじゃなくて、目の前の人の困りごとをどう解決するかということやった。

——はっぴーの家をはじめたきっかけはなんやった？

不動産屋さんの仕事をしてるとき、家賃の回収なんかもしてて。古い家があったんやけど、そこに酒癖の悪いおっちゃんに住んでてね。最初はあんまり好きじゃなかったんだけど、いつのまにか友達みたいになってしまった。で、そのおっちゃんが体を壊して入院して。やけど、治療を終えて出てきた頃には、車椅子生活になってたんよ。

——それは生活も大変やね。

おっちゃんは今の家に住み続けたいって言うんやけど、体の機能が落ちていて今の家の設備やと難しい。でもリフォームするにはお金がかかるから、家賃も上がる。そしたらおっちゃんは住めなくなる。結局おっちゃんは最終的に施設に行くことになったんよね。その時に初めて目の前の人の困りごとに対してなんにもできひんかったって思った。

——無力感のような。

そのとき、週に4、5回ヘルパーの人が来てて。お金がないのになんで来れるんかなと思って聞いたら、介護保険というものがあるらしいと。なるほど、自分がサービスと住まいの両方の提供ができたら、あのおっちゃんは住めたんじゃないかって。そう思ったのが大きなきっかけのひとつかな。あとは、自分の家庭環境やね。いろんな人が寄り添って暮らすことの価値に確信があった。

——まさにそういう暮らしを体現してきたよね。

よりそれを強化したのが、自分の子どもやね。奥さんには恥ずかしくてあまり言わんけど、父親としてなにか伝えたいと思っていて。やけど、術がないと思ってしまう。自分は学校に行っていないっていう劣等感のようなものがあるのかな。子どもを指導することは自分にはできひんって思ってしまう。だから、自分をアップデイトしようと思っ

んやけど、なんか違うなと思って。自分は自分の腑に落ちたことしかできひんなど。思い返せば、人に会って人と関わることで成長してきた。だから、そういう場をつくろうと思った。それは結局、子どものためになるし、みんなのためにもなるやろうと。

——なるほど。はっぴーの家のろっけんは、いつオープンだったっけ？

2016年11月には建物が使えるようになってた。でも

本当のオープンは2017年の3月。遅れたのは、自分が納得いってなかったからなんよ。実際にいろんな人に関わってもらってどんな場所にしたいかっていうワークショップをたくさん開いた。ちゃんとコミュニケーションとして機能する場にしたいかったんよね。だからオープンを遅らせた。銀行にはめっちゃ怒られたけど(笑)。オープンングパーティーには400人くらいの人に来てくれたよ。

——場所はもうやって決めた？

候補地はたくさんあったね。だけど、自分が生まれた地域でやりたいなとは思ってた。自分が思う新長田のまちはいいまちやったし。見せ方によっては変わるなって。古き良き部分も残ってる。あと外国人もたくさんいる。やけど、悪いイメージがある場所でもあったから、自分がなにかすることで今までの歴史や過去が救われるかとも思ってたね。

——救いという言葉が面白いね。

そういうこと、思ってるのかなあ。自分が長田に救われた気がするからかなあ。

——逆に地域や歴史に対しての恨み、みたいなものはある？

昔はあった。でも今はないかな。お金が欲しいとか、評価されたいとか、誰かを見返したいとか。最初の段階では、そんな思いが原動力になるのはいいことやと思ってる。だけど、しばらくやってきてそれが満たさ

れたときに、なんのためにやってるんやろうと思った。そういうのじゃないなって。

——とは言え、社会のためじゃないよね。

そう(笑)。目の前の人なんよね、結局は。それが広がっていく感じ。やっていて思うのは、与えるだけの関係は存続しないと思うんよね。与えられてばかりだとしんどい。与える側も麻痺する。社会保障の難しさはそこにあると思ってるんよ。自分がお世

話になっているなど思ったらお返しするし、したくなるやん。人間としては、対等な関係を続けたい。だけどそうじゃ

なくて、そこにいるだけで価値があるとも思ってる。その人がいるからこそ感じられることがある。入居しているお

ばあちゃんに「いつもごめんね」って言われることがある。ぼくはそれを聞いたときに、若者や子どもがここに遊びに来ることができていて、それが事業としても運営できているのは、みなさんのような方

がいるからですよって言うてる。そうやって存在自体を承認していくというか。

——「支えあう」と「依存する」のあいだみたいなことをやってるのかもね。

たぶんそうやね。

——一方で居るだけで意味あるんですか？とも思っちゃうよね。評価を求めちゃったりするというか。

評価されたいというのもあるけど、ただ受け止められた

い、自分がここに居続けていいんだと思いたい。そういうことを実はみんな望んでいる。コミュニティの中で目立つ人

だけではなく、ただ居る人こそ美しさを感じる。イベントの参加者と主催者とかのわかりやすい関係性だけしかない違和感を感じるんよね。

——わかりやすい関係に安心感を覚えるよね？今の社会は。よくわからないことへの恐怖がある。

そうやね。難しいよなあ。

なんで自分はわかりやすい関係に違和感を覚えるのかな。そこにヒントがある気がするね。

——そうやね。

それはもしかすると、自分がめっちゃしんどかった時にきっかけがあるのかも。子どもの頃、いろんな人に関わっていた時ね。もちろん楽しさもあったんやけど、さみしさもあったんやと思う。親に関われないっていう。わかりやすい家族への憧れはあったのかもしれない。だけど自分は

社宅の暮らしの中で、自分で安心感を見出していった。そうやって与えてもらったものを自分もつくりたいって思うんかな。子どもの頃はなにも

話せないけど、だれかと居たいという時もある。それが許される環境があったし、あるといいなってると思う。コミュニケーションができないわけじゃないやん。

——コミュニケーションができないことは悪いわけじゃないね。

最近、はっぴーの家ってなんやろうって思っているいろいろ考えている。ひとつ思ったのは、問いを投げかけるってことは大切になっているんやなということ。常に幸せの総量を増やすということは考えている。一人だけにフォーカスすると限界がある。だからその人に関わる人全体にフォーカスする。結果的に回り回ってそれがその人の幸せを生むんじゃないかと考えている。

——ものすごく問いがある。

個別のアプローチの限界というか。ネットワーキングしながら、狙っていないところも治療するみたいなことをやっているよね。ホリスティックな支援というのかな。

一人で仕事をしていた時はどこか頑張りすぎていた。不得意なことも完結してやらないといけなかったし。でも今は諦めがつくようになった。誰か得意な人にやつてもらおうと。ビジネスマンのスキルは下がったような気がするんだけど、与え

るものの価値は明らかに上がったように感じる。

——価値が上がった。

人間は自己完結したがる。早くしようと思ったらできるし、間違いないやることができる。だけどそれだったら面白くない。不確定な要素を入れない。それが自分の思う価値なんかな。

——だんだんそういう風に変わっていった？

子どものときが一番楽し

かったんだと思う。それが一旦どん底に落ちて、今上がっていている。過去の楽しかった瞬間を今、再現しているような感じ。事業としてやっていくためには数字も大事。ただ、自分がやっている事業はまず暮らしをつくりたいと思ってやっている。

——今まで印象に残っている失敗ってある？

資金繰りが危なくなること結構あつて(笑)。ソーシャルなことをやろうとすればず

るほど、資金的に難しくなることがある。本当は長期的にリターンがあるんやけどね。すぐにマネタイズしようと思つたらできないことはないんやけど、それをやると理想としていくとずれてしまう。なんかそういう性格やからあんまり失敗やと思わんのよね。もちろん問題は絶対に起こるけど、クイズやと思つてる。リスクがあるからやめようとは思わないし、最悪なリスクだけ想定しているかな。あと、クレームを出して

くる人はファンになると思っ

ているんよね(笑)。新しいことをやると怒られることも多い。だけど怒っているということはそれだけ関心があるということ。そうやってネガティブをポジティブに転換することが面白い(笑)。

——トラブル好きなの？(笑)

事業計画を組むのも面白いんだけど、それが崩れたときにどうやっていくのが楽しい。

——今後のほっぴーの家のイ

メージってある？

自分が忘れちゃいけないと思うのは、関わっている人の困りごとを解決していくという姿勢。それを見失いたくない。同時にそれだけだと視野が狭くなると思う。新長田のおじいちゃんを助けることが、ブラジルの問題にどうつながっているかという想像力が必要というか。リーダーのキャパシティがめっちゃ大事で、リーダーの器以上には成長しない。そのためにいろんなことを知ったり、いろんな



名前 首藤義敬
生年月日 1985年6月18日
職業 株式会社Happy代表取締役

暮らしの中にあるアタリマエをリノベーションする会社・株式会社Happy代表取締役。23才で遊休不動産の活用事業や神戸市長田区を中心に空き家再生事業を始め、27才で法人化。「多世代でシェアで暮らす昔の長屋のようなライフスタイルをつくることは、少子高齢化問題や子育てと介護のダブルケアを担う自分たち世代の正解ではないが選択肢の一つになるかもしれない」との仮説を検証するため、5年前よりハッピーの家プロジェクトを始動。みんなのためや社会のために事業化する事に興味がなく、目の前の関係性がある人のためになることに絞って行動している。

人に会ったりすることは大切。将来的には「グローバル資本主義」ではなく、ローカルな視点で海外に関わってみたいと思っている。

——自分たちの活動や事業がどこまで他地域・世界に通用するのかって考えるよね。

今ある制度だけで社会を維持するのは難しい。だから物事の尺度を広く取る。でもあまり他の国とかは言いたくないよね。自分自身もある程度若手起業家の部類に入っている。

るので、アジアがどうか言っちゃうと、やっぱり次はそこを目指しているんですね。みな話になっちゃうから(笑)。

——今、一番気になっていることは？

違和感が三つ以上集まると、どうしてもよくなるという説を唱えている(笑)。社会問題って解決しないといけないと思いがちやけど、解決できないことも多いと思う。だから今どうやってその人たちが楽しく暮らせるか、それでもいいやと思えるか。

も大事やなど。そのために、違和感を混ぜることが必要なんかなど思ってる。考えれば考えるほど人生はしんどい。だから理解できないことを認めていくっていう感じがな。自然は理解できひんやん。理解できないものの集まりが自然。だから社会の中に理解できないものを増やすのが自分の仕事。それが自然。これええこと言ってるよね(笑)。

——ええと思う(笑)。

Yuki Sakai
坂井勇貴

取材・文 藤本 遼

三角エコビレッジサイハテ

一緒に
高まっていかないと
面白くないよね。



終着駅JR三角駅の改札を出ると、広い海が見える。熊本の宇土半島にある「三角エコビレッジサイハテ」は、公共交通機関ではたどり着けない山奥にある。エコビレッジというのは、持続可能性を目標にしたまちづくりや社会づくりのコンセプトやコミュニティのことで、自給自足の暮らし（をする集団）などのことを指す。現在、全国各地にその動きが広がっており、この「サイハテ」も一つのモデルである。車で三角駅まで迎えに来てくれたのは「サイハテ」でコミュニティマネージャーという役割を担っている坂井勇貴さん。暮らしている住人の相談に乗ったり、外の人材を連れてきたりするのが彼の仕事だ。伸ばした髪と蓄えられたヒゲは、エコビレッジで暮らしている人のイメージにぴったりだった。

——早速なんですが、サイハテってなんですか？

ここは元々民間の保養施設みたいな場所で、放置されていた廃施設だった。そこを買い取って、2011年の11月に「エコビレッジをつくろうー」という掛け声のもと、サイハテ村が開村した。衝撃的だったのはこの発起人の工藤シンクという男が、ルールもリーダーもない「お好きにどうぞ」で村をつくろう、と提示したことだった。

——なんだかすごいですね。ぼく自身、エコビレッジや

コミュニティづくりをテーマにずっと活動してきて、大事なのはリーダーシップや合理的なシステム、ルールだと思ってきたんだ。だからそれを両方とも手放すって聞いた時は、頭を殴られた以上の衝撃を受けたよ。本当にそんなやり方で村がつくれるのかって懐疑的な部分ももちろんあったけど、それでもやってみたいっていう好奇心の方が大きかった。

——今はどれくらいの人が住んでいるんですか？

入れ替わりする短期スタッフが4、5人いて、彼らを含めると30人くらいかな。そのうち10歳以下の子どもが9人。最年長は64歳、最年少は0歳。うちは3人子どもがいるけど、みんな自宅でのプライベート出産。3人目は文字通りこの村で産まれたんだ。3人目の妊娠が分かっ取り組んだことは産小屋をつくることだったよ。

——それもすごいですね(笑)。

驚かれることが多いけど、ひと昔前まではみんな家で産んでいたし、出産は病院で先生に「産ませてもらわなきゃいけない」ってことじゃなあって思うんだ。別に医療を批判してるわけじゃなく、出産ということに真剣に向き合った時に、安心してお産ができて過ごせる場所をつくるのが大事だと思ったただけなんだよ。

——面白いですね。住んでい



る人はどのような仕事をして
いるんですか？

大工、縫製作家、バーマカルチャーデザイナー、猟師、家具職人、映像クリエイター、マッサージ師、アースバッグビルダー、ペインター、照明作家、ヨガインストラクター、歌手、コミュニティマネージャー、バリスタなどサブスクリルを合わせたら100を超す仕事ができるんじゃないかな。「百姓」って「百の仕事ができる人」のことを言うんだけど、僕らはみんなの力

を合わせて「次世代版百姓」って言えるかも。

——なるほど。でもやっぱりサイハテは「お好きにどうぞ」というコンセプトが一番大きいですよ。

ルールや制度、常識ってとても便利なものだけど、盲目的になりすぎる危険性もあると感じるんだ。ルールになっているからダメ、それは常識だってどこの誰か知らない人によって課せられた概念が、必ずしもあらゆるケース

に合うとは思えない。もちろん法律を犯すようなことはしないけど、時と場所や関係性などあらゆる要素を練り合わせた上で、何を選択するべきかって深く思考することは「お好きにどうぞ」の根っこにあるものだと思う。

——確かに「お好きにどうぞ」って優しいようで、厳しくもありますよね。

そうだね。責任と自覚がない上でお好きにやっちゃうと成り立たなくなるから。難し

い言葉でもあると思うている。「サイハテ」は、本当に不便なところだから、みんなでやらないと生きていけない。だから共同作業というものがあるし、コミュニケーションがベースになってくる。その上なら、個人個人が自由に好きなように生きることが可能になってくる。

——坂井さんはどういう経緯でここで暮らすことになったんですか？

ももとは法律系の専門学校に行っていた。

——見えないですよ（笑）。

そうだね（笑）。ルールってなんだろうっていうのがあったから。知りたくて。でもやっぱり面白くなかった。その後は沖縄でホテルマンをしたり、北海道でバーテンダーをしたり、オーストラリアでバリスタをやったり、宝島っていうところでオーガニックバナナ農家をしたり

（笑）。とにかくいろんな場所

でいろんなことをしてきた。

——なるほど。サイハテ村に住み始めたのはいつですか？

サイハテ村には2015年から住みはじめた。村づくりをしたいという自分の思いを実現できる場所をずっと探していたし「お好きにどうぞ」で村をつくるコンセプトに関心はあったからね。

——住人の入れ替わりはあるんですか？

もちろん。開村時のメンバー

は今ほとんどいないし、今年は結構入れ替わりそうだね。

——どうしてですか？

自分のステップアップのために暮らしている人もいれば、ただここで暮らしたいという人もいた。今まではそれも「お好きにどうぞ」としてきたけど、最近変化があるんだ。

——変化というと？

村づくりというかサイハテ村という認識について、変化

の兆しがみえてきた。今まで
はやりたい人やできる人がや
る、みたいなノリで回ってた
けど、7年という歳月を経
て「村づくり」に業務感や使
命感が付いてくる感じがして
るんだ。それを悪いとは言わ
ないけど、今までの「お好き
にどうぞ」とは少し違う匂い
を感じてる。

——かなり大きな過渡期で
すね。

そうだね。この1年はあ
らためて「なぜ村をつくる

のか?」「どんな村にしたい
か?」というコアな部分をも
う一度深く掘り直す年になる
んじゃないかな。

——今後はこんな流れになった
らしいなどかあるんですか?

強く思ってる訳じゃないけ
ど、サイハテっていう存在や
村づくりってことに情熱を
持つて関われる人が増えたら
いいなと思ってるよ。

——新しい人が入るというこ
とに今は期待していますか?

もちろん!サイハテ村って
いうのはここに関わる人たち
の営みでしかない。というこ
とはコミュニティが変化して
いくということは、人の関係
性が変わったり、表現の質が
変わったりすることだから、
新しい住人にはいつも期待し
ているよ。

——坂井さんの仕事ってなん
んですか?

ぼくはコミュニティマネー
ジャーを名乗っているけど、
住人で僕がどんな仕事をして

いるか説明できる人はいない
と思う。自分自身も言語化す
ることができていないくらい
だから(笑)。それでもぎっ

地よりも「船や船員」ってい
うそれを動かすモノにエネル
ギーを注いでる。

くり説明するなら、人の営み
を観察し、コミュニティの状
態を安定させたり、時に変化
させたりしている。イメージ
は航海士っていう感じかな。
リーダーっぽく見られるけど

——お聞きしたいんですが。
坂井さんは問いかけをとって
も大切にしていると感じてい
ます。でもそれは時間がかか
る。だけどそういうプロセス
を怠らない。それはどうして
なんですか?

「こっちに進むぞー!」みた
いにガンガン引張ることは
しない。「こっちに行くー?」
それともこっちかなー?」み
たいに提案はするけど、目的

そもそも自分はこうした
い、というのがないのかも。
未来をあらかじめ決めて誘導
したり、コントロールしたり

すると、みんなで作って
いる感じがないし、影響力や行
動力ある人に流されていくと
思っている。それは危険だよ
ね。こうあるべきだってこと
じゃなくて、みんなはどん
な風に感じているんだろうと
か、どんな事から何を学んだ
んだろうか?とかを語り合
いながら進んでいきたいんだ。
もちろん言葉にするのが難し
い人もいるし、ビジョンを
持っていない人もいるんだけ
ど、そういう人も参加して、
一緒に進んでいかないと自分

が見たい世界には辿りつかない
と思うっている。

——なるほど。

だから失敗しそうだった
り、こうだったらうまくいく
のにと思うことで
も待つようにして
いるね。それぞれ
が自分で悩んで答
えを導き出すこと
を大切にしている
から。問いかけも
もちろんそう。言
葉にできない人や

自己主張ができない人もどう
したら参加できるのか。みん
なの思いが反映されていく空
気感はどこなのか。結果より
もそういうプロセスに関心が
あるんだ。

——見たい世界ってどんなも
のですか？

アンパンマンみたいな
(笑)。めちゃくちゃ個性のあ
るキャラもいる。ほのぼのし
ている人もいる。でも不思議
と共存している。

一人一人が役割
や存在意義を認
識している状態
をつくりたいな
と思ってる。認
識ってコトだか
ら、スペシャリ
ストだけの社会



じゃなくて、偉い
とか肩書きがある
とかじゃない。た
だ子育てしている。
ただ野菜をつくっ
ている。そういう
人たちが不満や負
い目なく、満足し
ている状態がいい

などとは思っているんだよね。
でもそれを思っているけ
ど、難しい。社会は結構こん
がらがつてる。だから手の届
く範囲である「村」で実験し
てるんだ。

——どういうときからそう
いった考えを持っているん
ですか？

子どもの時からそう。も
ととは団地住まいだった。
子どもたちがいっぱいいて

一緒に遊ぶ相手
がつまんなそう
だとか、悲しん
でいるとか、仲
間外れにされて
いるとか。そん
なことがとって
も嫌だったんだ。
みんなが楽しそ

うな世界になればということ
を物心つく前から思っていた
よ。小学校でいじめがあつた
ら、いじめられっ子と積極的
にあそぶということをしてい
た。小学校5年生くらい

ときかな。なぜか自分は学校を抜けてその子の家に遊びに行つていい権利を獲得していったよね(笑)。いじめっ子を注意するんじゃないくて、適応できなかった子と一緒によく遊んでたよ。

——「サイハテ」で、今までで一番印象深いことは？

楽園という周年祭。毎年やっているお祭り。開催のだいぶ前からミーティングはしているんだけど、数日前までなにも決まらない(笑)。さ

らにそれぞれがやりたいことをやるので、予定も立てられない。だけど1週間前くらいになると、急にそれぞれ動き出して抜群のチームプレーを見せたりする。感心するほどに一体感が生まれるんだよね。その状態がすごいと思う。自分が目指している営みに近いなど。村づくりはゴールもないし、目標もない。だけど、周年祭みたいに明確ななにかを設定することも大切だと思っている。みんなコミットしやすいからね。

——村づくりって終わりのない仕事ですよね。

そうだね。やればやるだけ増えていくし。村づくりをコンテンツ化することでも沢山やってきたけど、難しいね。コンテンツ化やエンタメ化をするというのは、今の戦略としてはいいけど、本質ではないように感じている。なんでもかっと言うと、見てくれる人とか対象者を意識しちゃうから。そうすると作りの感が出る。こういうのって、純粹に味わってたほ

うが楽しいんだよ。例えば旅の経緯をブログで発信していると、目的がブログを書くことになることがある。自分だけが味わうような体験をした方が面白い旅ができる。スパイスとしてコンテンツ化するというのもありなんだけだね。こっちは暮らしそのものだから使い分けが難しいね。

——生活のどれくらいの割合を占めているのかというのがありますね。

期間とか頻度とかね。コン

テンツは良いきっかけにもなるし、モチベーションをあげられるし、ビジネス的にも有効な手段だとは思っているけどね。

——村から新しいことが生まれるということについて、どう考えていますか？

仕事が生まれたり、プロジェクトが生まれたりもしている。たとえば、ヨーロッパのパンを仕入れて日本のホテルで売りたいという人がいて。パンを置くためのおしや

れなディスプレイを提供させてもらうということでもたくさん契約が取れた。そのディスプレイを「サイハテ」の住人がつくっていて。あとは、お好きにどうぞってすごくいいと思うと言って「天才合宿」というイベントを開催する人がいたり。この場所に人が引き寄せられて、なにかが起こっていくということがたくさんある。

——いいですね。

いいアイデアや体験が生ま



れていくということはいいな
と思う。だけど、常に理想と
現実のギャップを感じてい
る。表面上でなにかを起こす
ことはできているんだけど。
個人的にはもっとガラッと世
界が変わるようなことってな
んだらうとずっと考えてい
る。数年やってきているけど、
小手先感が自分の中である。
社会的に貢献しているけど、
本質的な満足感には行き着い
ていないというか。

—理想、高いですもんね(笑)。

言ったら「世界平和のレシ
ピ」を考えてる訳だからね
(笑)。

名前 坂井勇貴

生年月日 1984年3月23日

職業 コミュニティマネージャー

「つまらなそうな大人たちが作る社会」に疑問を抱き、ルールを知るために法律専門学校に入学。卒業後、20歳で沖縄は八重山諸島に移住。そこで旅人やヒッピーに出会い、「自然と共に生きる文化」の探求をはじめ。北は北海道、海外はオーストラリア、タイ、インドなどのアジア数ヶ国を放浪。ヒッピーコミュニティや、ECOビレッジ、寺やアシュラムなどを回る中で、コミュニティ作りをライフワークにする。アートとクリエイティブ、リアルとWEBを融合させる「最先端な田舎暮らし」として注目を集める「サイハテ」のコミュニティマネージャーへ。運営から企画立案、メディア戦略、ブランディングにマーケティングまで「サイハテ」の進化を語る上で欠かせない存在。次世代型コミュニティ大学代表。

あとがき

わが国において、近年、多種多様な「場」が数多く生まれており、まちの活性化に大きな役割を果たしています。

これらの「場」は、いつ、誰が、どのようなきっかけで、どのようなして生み出し、持続してきたのでしょうか。当財団では、これらの点を明らかにして、「場」づくりの参考となる情報を広く発信することによって、まちに多種多様な「場」が生み出され、より活性化するのではないかと考えました。

そこで、国内で多種多様な「場」づくりに取り組む実践者の方10名

にお話をうかがうことにしました。

取材と執筆は、「場」づくりに造詣が深く、自らも「場」づくりの実践者である尼崎 ENGAWA 化計画の藤本遼さんに、そして、冊子デザインは、KEYDESIGN のすみかずきさんをお願いしました。

本冊子を通じて、多種多様な「場」や「場」づくりの実践者に触れていただき、今後の「場」づくりの参考にしていただけると幸いです。取材にご協力をいただきました「場」づくりの実践者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人尼崎地域産業活性化機構

理事長 加藤恵正